



ONE WORLD Info

英語教育 通信

中学生に夢と希望を与えてくれる人たち～新版ONE WORLDを彩るユニークな人たち～ … 松本 茂

英語教育にもっと夢を … 浦島 久

落語で広がる、楽しい英語学習 … 桂かい枝

伝わる重要性 … 柴田 知佐

進んで人と関わり、コミュニケーションを図ろうとする児童の育成

～6年生“World Trip”の実践を通して～ … 宮脇 郷子

とっておきの英語 2 Atta boy! … 野田 小枝子

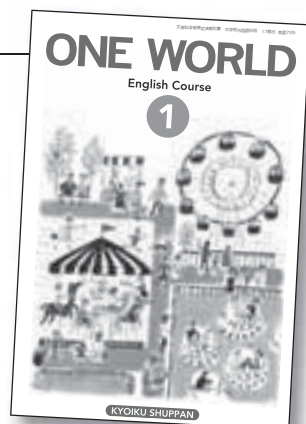
今ドキ英語事情

Broadening the mind — and the language — with travel!… Peter J. Collins

中学生に夢と希望を 与えてくれる人たち

～新版ONE WORLDを彩るユニークな人たち～

● ONE WORLD 代表著者 松本 茂（立教大学）



中学生の時にちょっとしたことで思い悩んでしまったという経験をおもちではありませんか。あるいは、自分はいったい何がしたいのか、何ができるのか、といった将来への漠然とした不安感をもっていた、という方も少なくないでしょう。

そんな多感な中学生の心と頭を揺さぶり、夢や人生の目標を見つけてもらうきっかけとなるような英文を、限りある単語と表現で、そして行数制限がある中で作成するのは容易なことではありません。

それでも ONE WORLD は、様々な観点から工夫を凝らし、内容面でも ONE WORLD ならではの特色を出していると自負しています。その1つが、本文に登場していただく光り輝く人たちです。

今回は、ONE WORLD にご登場願った方のうち3名の方々に、本教科書をご使用いただく先生の方々にメッセージを直接寄せていただきました。

本文の背景だけでなく、私たちがなぜこの方々を教科書に取り上げさせていただいたのかがわかりいただけることと思います。お楽しみください。

浦島甲一さん

写真家の浦島甲一さんには、2年生の Lesson 6 に登場していただいております。た

だ、浦島甲一さんは2001年に逝去されていますので、今回は息子の浦島久さんに原稿をお書きいただきました。

甲一さんを有名にしたのは、教科書にも掲載させていただいたハルニレの木 (Elm Tree) の写真です。甲一さんは十勝の自然を被写体として、雨の日も雪の日も十勝の自然を撮り続けました。中でもハルニレの木は10年間撮り続けたとのことでした。

甲一さんの写真からは十勝の自然の息づかいが伝わってきて、写真を見るだけで十勝の自然のすばらしさを感じられます。そして、写真という媒体がもつパワーは、言語のそれよりも大きい場合があるということを感じずにはいられません。

そして、息子の久さんも、ONE WORLD の旧版でお父様のことが取り上げられたことがきっかけとなり、数年前から写真を撮り始め、今や個展を開くまでに腕をあげています。甲一さんの意志を継ぎ、北海道の自然を被写体としています。

そして、甲一さんが撮り続けたハルニレの木をモチーフに、久さんが大阪府寝屋川市の中学生とのコラボレーションで書きあげた歌詞に作曲家の神山純一さんが曲を書いてくださり、“Elm Tree Dreams”という歌までできあがり、楽譜付きで ONE WORLD に掲載させていただきました。

みなさんの生徒さんたちにぜひ歌っていた
だきたいですし、甲一さんが撮り続けた写真
がこうやって人の縁を作り、人々にパワーを
与えてくれることを感じ取ってもらいたいも
のです。

桂かい枝さん

3年生の Lesson 3 で桂かい枝さんを取り
上げさせていただいております。師匠はテレ
ビ等でもご活躍なので、ご存じの方も多いと
思います。

「日本人はユーモアのセンスに乏しい」と
いう世界の人々の誤解を解こうと英語落語を
始められたわけですが、今や文化庁から文化
交流使に任命されて、世界各地で公演をされ
ております。

私も師匠の英語落語の公演を何度か聞かせ
ていただいておりますが、日本語がわからな
い人たちもまさしく腹を抱えて笑っていま
す。日本の古典落語の笑いは世界に通じると
いうことは実証済みです。

師匠のようにプロになるという話は別で
すが、中学生が落語をはじめとした日本の伝
統芸能に興味・関心をもち、その長い歴史に
誇りを感じてくれればすばらしいことです。
さらに、英語を通してそのすばらしさを世界
の人々に伝えてくれれば、日本人への偏見が
減り、正しい理解につながることでしょう。

当該のレッスンでは「オチを想像して英文
を書いてみよう」という task もありますの
で、ぜひ、生徒たちに、英文を書いたあとに
実際に演じてもらうとよいでしょう。

柴田 知佐さん

柴田さんには3年生の Lesson 4 に登場し
ていただいています。

彼女が地雷廃絶運動と関わり合うようにな
ったのは、全国地雷廃絶ポスターコンクール
に小学校5年生で入賞したときにさかのぼ
るというから驚きです。

先生や親に言われてコンクールに応募する
小学生もいるでしょう。しかし、柴田さんは
自ら応募し、入賞した後は地雷廃絶を訴える
漫画『ノーモア地雷』を描かれております。

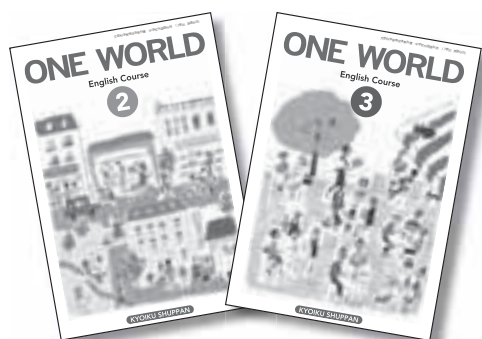
柴田さんは地雷廃絶を訴える活動をその後
もつづけ、カンボジアの地雷が埋められてい
ると言われる地域に行き、地雷の被害にあっ
たカンボジアの少女と交流しています。

大学院生となった現在も、講演や募金など、
地雷廃絶の活動をつづけていらっしゃるいま
す。このように、もう10数年以上にわたり
継続的に活動をつづけていることに頭がさが
ります。

日本の普通の中学生にとって、地雷は身近
な問題とは言えないでしょう。しかし、世界
の多くの人たち(とくに同世代の子どもたち)
が地雷の犠牲になっているという現実が存在
します。

教科書を通して柴田さんの活動を知ること
によって、日本にいながらにしてできる3つ
のこと(知ること、伝えること、行動すること)
のうちの、まず1つ目をクリアできます。
そして、英語を使うことができれば、日本語
ができない人たちにも地雷の悲惨さを伝える
ことができるのです。

今回、本誌に取りあげさせていただいた3
名の共通点は、「信念をもってひとつのことに
長年打ち込む」ということだと思います。
多くの人々に関わる公共性のある事柄のなか
で、自分ができることを見つけ、不断の努力
を怠らずに、しかも楽しみながらやりつづけ
る…。そんな生き方のすばらしさを教えてく
れる輝く人たちです。



英語教育にもっと夢を

●浦島 久

(ジョイ・イングリッシュ・アカデミー学院, 小樽商科大学)



私の父、浦島甲一は北海道・豊頃町で長年電気店を営んでいました。趣味は写真。「あれこれ撮ってもいいものはできない。自分は十勝に特化する」というのが口癖でした。中でも父を有名にした被写体が、豊頃町のシンボル、ハルニレの木です。四季を通じ10年に渡り撮影した写真がポスターやテレビCMに使われたり、写真集、DVDになって全国発売されました。

でも、他界後、まさか自分の話が中学の英語教科書に取り上げられるとは、父は夢にも思わなかったことでしょう。平成23年版 *ONE WORLD* (中学3年) の Lesson 4 “My Dream” で、アキが将来の夢についてスピーチをします。その中で “I want to be a photographer like Urashima Koichi.” と言い、私の父が紹介されています。

人生はおもしろいものです。北海道・帯広市で英語を教えている私に、このページを使って模擬授業をして欲しい、というリクエストがきたのは2009年のことでした。それも大阪府寝屋川市の教育委員会からです。そんなことは、私だって夢にも思っていないませんでした。

さらに驚いたのは場所でした。そこは1,200名も入る市民会館大ホール。しかも、舞台上で30名の地元の中学生を対象に30分の授業をすることになったのです。ステージ両側には大型スクリーンが用意され2台のカメラから映像が流されるというのですから、まるで

ロックコンサートのような授業です。

こんな経験は一生に1度あるかないかでしょう。授業構成を担当の先生と相談しながら私なりにいろいろと考えました。

最終的には、父の紹介から始まり、生徒の夢を聞き、そして私も自分の夢を語る。授業のエンディングは、「夢」をテーマに生徒が協力して書いた英詩に私が同じ長さのものを付け加え、それを当日会場で発表する。そんな流れを作りました。

ただこれだけでは物足りないと考えた私は、生徒には内緒であるものを準備しました。友人の作曲家、神山純一さんにお願ひし、その英詩にメロディーをつけてもらったのです。そして、私が経営する英語学校で働く2人のアメリカ人に歌ってもらい、録音しました。もちろん生徒には最後までこのことはまったく知らせませんでした。

私の夢に関してですが、話をおもしろくするためにちょっとした作り話を考えました。“My dream is to become a photographer like Urashima Koichi.” ということにしたのです。それまで私は、スナップ写真を撮ってはいいましたが、本格的な風景写真は撮ったことはありませんでした。

「写真家になることが私の夢」という手前、自分でも少しハルニレの木の写真を撮ろうと考えました。そんなわけで、ハルニレの木がある豊頃町まで、私が住む帯広市から車で1時間かけて通う日々が始まったのです。

しかし、写真を撮るのはそんな生易しいことではありません。夜明け前の真っ暗な草原を歩くのです。服は朝露でべちょべちょになるわ、太陽が顔を出さないわ。目が悪い私にはピントを合わせるだけでも大変でした。しかし、むかし父が同じ場所で同じ木を眺めながら同じ「とき」を過ごすのです。そう考えるだけで大きな感動を覚えました。

たいした写真は撮れませんでした、それなりのものは10数枚ぐらい集めることができました。模擬授業の最後で「私の夢は写真家になること。それでは、私が撮った写真を見てね」と言いながら、プロジェクターを使って大型スクリーンに写真を投影しました。そのバックには生徒と私がコラボで作った曲、“Elm Tree Dreams”が！

流れる歌詞が自分たちの作ったものだと思いついたときの生徒たちの表情は格別でした。英語教師としての私の人生において、決して忘れることのできない画期的な授業になりました。

その“Elm Tree Dreams”の楽譜が平成24年度から使われる中学2年生用の*ONE WORLD*に載ることになりました。こんな夢のようなことが現実には起きたのです。さらに驚くべきことに、今では私は本当に写真家になることを目指しています。1週間に1度は豊頃ハルニレの木に行き、父との対話を楽しみながら、四季を通じて写真を撮っています。いつか父と私のハルニレの木の写真を並べて「親子二人展」を開くのが今の夢です。

夢は、もつだけでも意味があります。そして、いつか実現させると考え続けることが大事です。私は、父のようにうまく写真を撮ることはできない、とずっと思っていました。でも、それはやってみなかっただけ、ということが分かりました。そのきっかけを与えてくれた模擬授業に感謝しています。

新学期から使う新しい*ONE WORLD*のレッスンを通じて、夢をもつことの大切さを

1人でも多くの生徒に伝えてもらえると嬉しいです。英語はそれができる科目だと私は思います。

私の英語学校のキャッチフレーズは「飛び出せ、世界へ。英語は翼」。英語は生徒の未来に対する可能性を与える翼です。少しでも大きな翼を生徒に与えてください！いや、生徒が本来もっている翼をより大きくし、羽ばたいていけるよう手助けしてあげてください。



Photo by Hisashi Urashima

Elm Tree Dreams

Make an effort to fulfill your dreams
Keep challenging yourself for your dreams
Never give up on your dreams
Try your best for your dreams
*One for all, all for one.
Stand tall like the elm tree
One for all, all for one
Stand tall like the elm tree.

We can't live without having dreams
Dreams are always worth fighting for
If we really keep on trying
All our dreams will come true

<http://www.youtube.com/watch?v=JBolOP5qBvE>
(YouTubeに入っているこの“Elm Tree Dreams”は教科書の歌詞とは少し違います)

落語で広がる、 楽しい英語学習

●桂 かい枝（落語家）



落語家の桂かい枝と申します。今回、私の活動と落語『動物園』が英語の教科書に取り上げられることになりました。「えっ？なぜ落語家が英語の教科書に？」とお思いかもかもしれませんが、私は普通の落語家とは一風変わった活動に取り組んでいます。400年の歴史をもつといわれる日本独自の「笑芸＝落語」の魅力を海外の方にも知ってもらいたいと、古典落語を英訳し、海外の観客に紹介するという活動を1997年から行っています。2007年には文化庁より文化交流使に任命され、これまでに世界15か国90都市で公演を行っております。今回は私の活動と英語落語の魅力を簡単にお話させていただければと思っております。

そもそも英語で落語を始めるきっかけとなったのは、30年ほど前から世界で話されているこんなジョークを耳にしたからです。

「ジョークを聞いて、普通に笑うのがイギリス人、半分まで聞いて笑い出すのがフランス人、一晩じっくり考えて翌朝『プッ』と笑うのがドイツ人、『そのジョーク古いよ。新しいの知ってるよ』と自慢をするのがアメリカ人、その場ではニコニコしてるけど何にも分かってないのが日本人」。日本人は見事に落ちにされています。

他にはこんなものもあります。「日本人を月曜日に笑わせるには？ 金曜日にジョークを言え」。日本人はユーモアを理解する能力が乏しいので、金曜日にジョークを聞いて、土日の2日間の休みを使って意味を考え、ようやく月曜日にその意味を理解して「ふふふ」と笑う。

そんな風にジョークでネタにされるほど、日本人はユーモアを理解する能力が乏しいと海外の人には間違ったイメージをもたれているんですね。こんなジョークを聞いた時、日本伝統の笑芸を生業とする私はとても悔しい思いがしました。「絶対にそんな間違ったイメージを変えてやろう！」そう思いました。

事実、日本には古くから笑いに親しむ文化がありました。例えば、あの『古事記』の中にも笑いをを用いた表現が使われています。天照大御神が天の岩戸を開けると光が差し込み、八百万の神々の顔を照らした。神々の頬が白く輝いておもしろし、という洒落、^{じぐち}地口ですね。

現代でも、狂言・落語・漫才・漫談・コント・喜劇など、様々なスタイルの笑いの文化が日本にはあり、広く楽しまれています。何より、落語という世界に類を見ないすごい笑芸があるということを世界の人たちに知ってもらいたい、という思いから英語落語の活動を始めました。

習い始めた中学以来、ずっと英語は大好きです。そのきっかけは、中学時代の恩師との出会いです。中学時代の3年間英語を教えてくださいました中島史郎先生という、当時50歳を回られたベテランの先生、僕ら生徒の間ではE.T.というあだ名で呼ばれていました。頭髪がなくツルツルで、おまけに目がクリッとしていて、その頃ヒットしていた映画の主人公E.T.に似ていたのと、English TeacherでE.T.という2つの意味があったのですが、非常に熱心な先生で、とにかく読み書きを徹

底的に鍛えられました。授業中、カセットに合わせて全文を暗記してしまうくらいに音読と書き取り。来る日も来る日も音読、書き取りの繰り返し。音読は、発音が悪いとひどく怒られました。書き取りでも、えんぴつの持ち方が悪いとまた怒られます。本当に厳しい授業でした。夏休みも1日も休みなく補習がありました。もう怖くて恐ろしくて鬼のような先生で、よく英語が嫌いにならなかったなあと思いますが、それには理由があったんです。

中島先生、授業の合間にふと人が変わったように穏やかになり、ご自身の経験を話してくださることがありました。若い頃アメリカを車で旅したことがある先生のアメリカひとり旅のお話はすごくリアルで、冒険小説を聞くかのようにワクワクしたものです。

「ネバダ州の砂漠の中的一本道を夜中に車で走ってたんや。もう真っ暗でなあ、車の明かり以外には何も見えない、不安で不安でなあ。小高い丘を越えるとさっきまで真っ暗やった目の前に突然星空が浮かんで来たんや。よく見たら星空やない、そこがラスベガスやったんや」。

まだ飛行機も乗ったことのない、当然海外にも行ったことのない中学時代の僕にとって、先生のリアルな旅のお話は大変な衝撃でした。英語を勉強すると海外に行けるかもしれない。自分の可能性が広がるかもしれない。先生はそんなことを考えてお話になっていたとは思いますが、僕にとっては大きな夢を描かせてくれる素敵なお話でした。

先生って本当に重労働で大変なお仕事でしょうが、子供たちの未来を人生を作る、すごいお仕事なんですね。

私も大阪樟蔭女子大学で5年前から『英語実践研究』という高座ならぬ、講座を受けもっています。これは実際に英語落語を授業に取り入れ、まったく落語を知らない学生に半年間で落語の基本から小噺、最終的には英語落語一席を暗記し、観客の前で演じて、笑ってもらおうという内容の授業です。落語は、基本的にはト書きのない会話形式の一人芝居で、ほとんどがセ

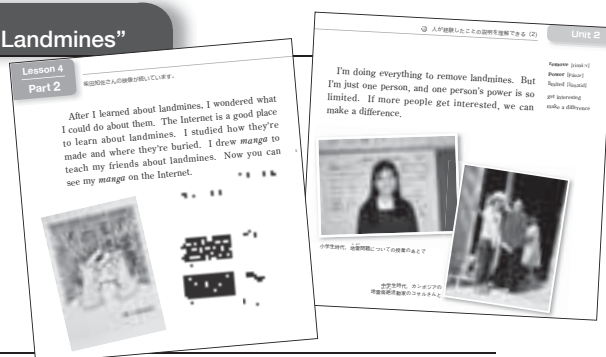
リフだけで物語が展開します。お芝居ですから、セリフを発声するときは当然その人物になりきり、気持ちを込めて観客に伝えることになります。つまり英語落語は、英語のセリフをその人物になりきり、表情や声のトーン、体の動きなど全身を使って、感情を込めて表現する練習になります。これは英語の表現力を磨く練習になります。

そして、英語落語の一番大きな魅力は、やはり笑いです。自分が発したセリフで観客(クラスの友達が、家族が、外国人が)が笑ってくれる、反応してくれるということです。これが学生さんには何より大きな自信と喜びに繋がります。実際、大阪樟蔭女子大では毎年英語落語の発表会を開催するのが恒例となっており、ネイティブスピーカーを中心に200人以上の観客が聞きに来てくださるのですが、その公演を通して、学生たちは凄い経験をします。自分の英語で200人もの外国人が腹を抱えて笑ってくれる。「素晴らしい！面白い！」と拍手をしてくれる。普通の授業ではなかなか経験することのできない、英語で伝える、伝わる喜びをリアルに体験できるんです。観客の前で落語を演じるわけですから、学生たちは、これまでに経験したことのないほどの緊張感で高座に向かって行きます。泣き出しそうな子もいます。が、落語を終えて帰ってくるときには、本当に目をキラキラさせて、「先生、私めっちゃ受けた！！すごい嬉しかった！感動した！」って、イキイキと話してくれるんです。中には、「先生、こんだけ受けるねんから、私、プロになる！」って、勘違いをしてしまう学生さんいますが、学生さんにとってはこれまでの人生で経験したことのない感動なんです。

ONE WORLDをお使いになる先生方には大変にご苦労をおかけすることになりますが、是非生徒さんに「英語落語を覚えて外国人を笑わせよう！」という目標をもって取り組んでいただき、英語で伝える感動、笑わせる感動を味わっていただきたいと心から願います。

伝わる重要性

●柴田 知佐（立命館大学大学院）



私は小学校5年時の総合学習がきっかけで、現在地雷問題に関する研究と、地雷廃絶へ向けたボランティア活動を行っている。街頭募金や講演等、問題の発信を行うことが多いが、その手段について考え直す機会があった。

先日、愛知教育大学にてNIE（新聞を題材にする授業）講座が開かれた。教員免許更新講座の一環である同企画は、「プロから学ぶ新聞」をテーマに、教員約50名が新聞記者から講義を受講し、記事を想定しての模擬インタビューを体験、取材の意味やノウハウを学び授業に生かすというものであった。そこで私は模擬インタビューの取材対象を務めた。先生方からの質問は、活動の動機や内容に触れる定番なものから、私の小学校時代の授業方針や活動の金銭面等、答えに一瞬詰まるような予想外なものまであり、どれも先生独特の視点が効いていて終始頭を捻りながら答えを導き出すという取材体験であった。

質疑応答を行うと、自分自身ではさして重要と思っていた事柄が実は他人にとっての一番気になる点であったり、自分の中では当たり前になって口にしなかったことが実はそうではなく、かえって説明不足になってしまっていたりということに気付かされる。逆も然りである。

取材の質問に答える中で、自分の活動を趣味であると称した私に、即座に先生から「趣味なんですか?」と指摘が入った。一人NGOとして学業や生活面以外の空いた時間

を活動にあてるスタイルは、仕事ともサークルとも異なっていたが、“Hobby”は遊びや興味本位で取り組むイメージが先行しての、先生の一声であった。10年以上取り組んできた活動は当然生半可な気持ちで行っているものではなく、私のライフワークであり、人生をかけて取り組むべき課題であり、一言にまとめるのは非常に困難であるが、一期一会の出会いの中で自分の一言は適切ではなかったと後になって恥じた。自分の語彙力や伝達力のなさを反省し、同時に単語1つで言いたいことが変化するのに、伝えることの難しさを感じた。

伝える・伝わることについて真剣に考えたのは、今回が初めてではない。過去にカンボジアの地雷原を訪問し、地元の方にインタビューをする機会があったが、そこで感じたのは言葉の壁である。カンボジアには優秀な通訳士も多く存在するが、やはり生の声に勝るものはなく、現地の言葉で1対1で話せることが望ましい。しっかり相手の目を見れば雰囲気や感情は多少なりとも理解できるが、相手の言葉のどの部分に喜怒哀楽のニュアンスがあるかは自分では分からず、こちらから伝える場合も質問内容は伝えられても言葉にのせた気持ちを渡すことは難しい。さらに通訳を介すと言葉の橋渡しの間、1度間が空くので当然会話のテンポは遅くなり、反対に効率性を優先すると通訳士の判断で言葉が削られ短くなったりする。

現地に行くと言葉がなくても伝えられるものの、肌で感じられるものもたくさんあるが、被雷者が辛い過去をぼつぼつと口にするのを目にしたとき、自分は言葉の意味と内容をどの程度理解して受け止められているのかと改めて考えさせられた。

また、私の友人にカンボジアで被雷してしまったソン・コサルという女性がいる。彼女は地雷によって片足を失ってしまったが、自分にできることとして地雷の悲惨さを伝えるべくユース大使として世界中を飛び回っている。日本にも地雷関連のサミットが開催される度に訪問しており、近況を報告しあったり顔を会わせたりするのを楽しみにしているが、ここでも言語が異なる歯がゆさを感じる。志を同じくする国境を越えた友人と、込み上げる想いや今後の展望を語る時、スムーズに会話ができないのは悲しい。

私は「伝えること」は、気持ちがあれば方法は後からついてくると考えていたが、活動を通して様々な場面に会うことで、相手に何かを伝えるためのスキルを磨かねばならないと感じた。より深く相手を理解したり、気持ちを伝えるためには、その為の手段を知っておくべきである。特に語学は必須である。

カンボジアではクメール語が主流であるが、学校では英語を教えているところも多く、都市部では英語を話す人がちらほらいる。コサルの言葉は優しげで、強い。「地雷を踏んでしまったことは運命として受け入れている」と言って顔を上げて前に進む彼女の話を、いつか詳しく聞いてみたい。

1997年に対人地雷全面禁止条約（オタワ条約）が採択され、世界の約8割を占める156の国が条約に参加し、4500万個の保有地雷が破棄された。アメリカ等の条約未参加国も事実上は条約の取り決めに従っており、近年は製造・輸出・使用等を行っていない国がほとんどである。しかし現在もカンボジアを始めとする60以上の国・地域に6000万～1

億個もの地雷が埋設され、1時間に約2、3人が被雷する等、依然、被害状況は深刻なままである。1年間に撤去できる地雷の数も現在約30万個が限度とされており、よりいっそうの働きかけが必要とされている。

地雷問題に向き合った時、私は問題の再喚起が必要であると深く感じる。日本では、条約批准と共に日々地雷問題が大々的に各メディアで取り上げられる等、地雷廃絶運動が盛り上がりを見せたが、年月の流れと共にブームが衰退する様に問題意識も風化してしまい、現在では地雷という単語をニュースで耳にすることは非常に稀である。地雷が世界中から撤廃され、その後単語を耳にする機会が減るのはいいが、今も被害が続く状況で問題を忘れてしまうのはどうであろうか。

日本にいてもできる活動としてよく挙げられるのが、「知ること、伝えること、行動すること」の3ヶ条である。実際に募金やキャンペーン等の行動を起こすことも重要であるが、「伝えること」の重要性を今感じる。今こうしている間にも悪魔の兵器の被害に遭い、手足をものがれ心身共に苦しんでいる人がいることを再度認識し、声をあげることが必要なのではないだろうか。

今回、教科書によって地雷問題が再度広く伝えられることになり、大変嬉しく、有難く思う。「6次の隔たり」は知人を6人介せば世界中の人と間接的に繋がることができるという説であるが、1人が声をあげることで情報は網目状に無数に広がってゆく。教材を使用する先生、生徒さんを通して、ここから地雷廃絶の芽が世界中に飛んでゆけばと思う。

後日、NIE講座に参加された先生からメールが届いた。地雷について知ることができ、生徒にも是非伝えたいとのメールに胸が熱くなった。9月から語学習得のため、留学に出立する。見聞を広め、より精進し自分にできることで地雷全面禁止へ向け取り組んでゆきたい。

進んで人と関わり，コミュニケーションを 図ろうとする児童の育成

～ 6 年生 “World Trip” の実践を通して～

鳴門市第一小学校 宮脇 郷子



1 はじめに

本校は，平成 19・20 年度に文科省と鳴門市より指定を受け英語活動等国際理解活動推進事業の拠点校として 2 年間の研究に取り組んできた。5・6 年生の外国語活動は今年度で 5 年目を迎える。当初は『英語ノート』もなく試行錯誤の連続であったが，全校挙げて取り組む中で，本校なりの単元構成や活動内容も模索してきた。その一端を紹介したい。

2 “World Trip”（『英語ノート2』『行ってみたい国を紹介しよう』）の実践

① 単元について

本単元は，世界の国々の名前や名所を話題とする。児童は前単元 “School Trip” で修学旅行の行き先のいくつかが世界遺産であることを知った。東大寺や金閣寺の大きさ・美しさを体感し，それを現在にまで残した人々の英知や努力を知ることで，外国の世界遺産に対しても興味をもつことができたようである。世界遺産を中心に，自分の行きたい国や見たいものを興味をもって調べ，それを伝える活動を行うことで，コミュニケーションの楽しさを味わわせたいと考えた。

② 単元目標

- (1) 外国にはさまざまな世界遺産があることに気づく。
- (2) 行きたい国やその理由を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。
- (3) 自分の行ってみたい国やその理由を尋ね

たり答えたりし，積極的にコミュニケーションを図ろうとする。

③ 単元計画

時	目標（○）と主な活動（①・・・）
1	○世界遺産の写真を見て，世界のいろいろな場所を知る。 ①修学旅行の行き先が世界遺産であることを知り，外国の世界遺産の写真を見て話し合う。 ②『英語ノート』のデジタル版を見て，国旗クイズをし，国旗の色や形には意味があることを知る。 ○行きたい国を尋ねたり答えたりする。
2	①行きたい国とその理由を聞き，概要を理解する。 ②行きたい国を尋ねたり答えたりする表現を知り，ゲームをして表現に慣れる。 ○行きたい国を話す準備をする。
3	① HRT と JTE の話を聞き，発表の仕方を知る。 ②ゲームをして理由の言い方に慣れる。 ③グループで発表の練習をする。
4	○行きたい国とその理由を尋ねたり答えたりして，積極的にコミュニケーションを図ろうとする。 ① ALT の出題する「行きたい国あてクイズ」をする。 ②行きたい国とその理由をインタビューし合う。

④積極的なコミュニケーションへの手だて

(1)使用表現に慣れ親しむ

積極的なコミュニケーションを支えるには、使用表現にある程度慣れていることが必要である。子どもたちが、興味・関心をもって楽しく活動しながら、自然に英語の表現を聞いたり発話したりできるように、ゲームの方法を工夫している。

本単元では第2時に、行きたい国を尋ねたり答えたりする表現に慣れるために「すごろくゲーム」を実施した。10枚程度の国旗カードを黒板に貼り、チームに分かれてALTとジャンケンをし、勝ったチームが駒を進めていく。全員で言うジャンケンのかけ声を“Where do you want to go? One,Two,Three!”とし、駒を進めるときには“I want to go to ____.”と声をそろえて言うことで何度も同じ表現を使うようにした。

第3時でも、その国に行きたい理由の言い方に慣れる活動として、「仲間集めゲーム」をした。子どもたちは、ゲームを楽しみながら抵抗なく表現に慣れることができたように思う。また、ゲームの中では、声を掛け合ったり、励まし合ったりして関わりを深め合う姿も見られた。

(2)「伝えたい」意欲をもつ

子どもたちが「本当に伝えたいもの」をもっていることが、積極的なコミュニケーションを促すと考える。本単元では、総合的な学習の時間との関連を図り、事前に世界の国々について調べ、自分が行きたい国とその理由をワークシートにまとめた。図書室の本やインターネットで調べ学習をしたり、好きな写真を選んだりすることで、子どもたちの「行きたい国」への思いは高まっていった。

他教科では活躍の場面が少ない子どもが、積極的に友だちと関わり、堂々と発表する姿を見て、子どもたちの「心」を動かす題材設定の大切さを改めて感じた。インタビューの後に、ワークシート裏面の世界地図に自分の

シールを貼り合ったこともコミュニケーションへの意欲をもたせる要因となった。



(3)よりよい関わり方を体験的に知る

インタビュー活動の前に、HRTとALT・JTEがさまざまな会話のモデルを示し、相手にとって分かりやすい伝え方、相手が話しやすい聞き方について考える時間を設けた。

その中で子どもたちは、相手意識をもって写真を指さす等の工夫をすることや、視線や表情・速さに気をつけて話すことで、より分かりやすく伝えられることが理解できた。また、聞いたことを繰り返したり相づちを打ったりすることで、相手が安心して話せるように聞くことが大切であることに気づいた。その後のインタビューでは表情豊かに思いを伝え合う子どもたちの姿が見られた。

3 おわりに

子どもたちが活動の中で豊かにコミュニケーションする姿を目指して単元構成や活動内容の工夫に取り組んできたが、まだまだ十分とはいえない。今まで以上に、子どもたちの興味や意欲をとらえ、積極的に活動する姿をイメージしながら目標に向けた活動を仕組んでいくことで、外国語活動の時間での学びは確かなものになっていくと考える。

活動の中で成長する子どもの姿を求めて、今後も研究を重ねていきたい。

Atta boy!

●津田塾大学大学院 野田 小枝子

映画、小説などのジャンルから英語表現を取り上げ、英語の文の形と、そのコミュニケーション機能を考えてみようというコーナーの第2回です。今回は「ほめる」という機能について考えてみたいと思います。

先生方は生徒を英語でほめるのにどんな表現を使っているのでしょうか？ *ESL/ELL Teacher's Book of Lists* (J. E. Kress 著, 2008 年) には、教師がよく使う 100 ほどのほめことばが並んでいます。形の上でタイプに分けると次のようになるでしょうか。「ほめる」という機能には、さまざまな英語構造が対応します。

●形容詞句タイプ

Excellent! Impressive! Very nice! Terrific!

Fantastic! Outstanding! Superb!

Very creative! Exactly right!

●名詞句タイプ

Good work! Good job! Beautiful work.

Very fine work.

●受け身タイプ

Well done. Well organized.

●感嘆文タイプ

What neat work! How nice!

●命令文タイプ

Keep it up. Keep up the good work.

●陳述文タイプ

You've got it! You did well today. You made a great start. You've made my day. Now you've figured it out. You're on the right track. That's the way to go.

●間投詞タイプ

Congratulations! Hurray! Bravo!

上はほんの一例です。100 個は多いようでも、ご存じのようにほめことばはこのほかにいくつでもあります。

100 の中にはありませんでしたが、男の子や男性に向けて使う、Atta boy! や、女の子や女性に向けた、Atta girl! は、映画の中でおなじみの表現かもしれません。クリスマスになるとアメリカのテレビで必ず放映される *It's a Wonderful Life* (1946 年フランク・キャプラ監督映画で、邦題は『素晴らしき哉、人生』) の中で、主人公役のジミー・スチュアート (James Stuart) が、ドジばかりでなかなか翼をもらえない守護天使のクラレンスに命を救われます。守護天使はその手柄のためにやっと翼をもらうことができ、ジミー・スチュアートが "Atta boy, Clarence! (よくやった、クラレンス)" と言ってウインクをするところでこの映画は終わります。クラレンスはかなり年配の天使なので、この表現が年齢に関係なく使われることがわかります。

atta boy は、that's the boy が変化した形だと言われますが、今ではこの名前のバンドができた



"Atta boy, Clarence!" 映画『素晴らしき哉、人生』より

り、Atta girl という名前の会社ができたりしているようです。

次は、本の中で出会った、私が好きなほめことばの 1 つです。

Tell her it was the most delicious sandwich I ever had in my life.

(こんなにうまいサンドイッチ食べたことないって、君のお母さんにそう言ってくれ。)

自分の母親をほめられて嬉しくない人はいません。

上の一文は、フランク・マコート (Frank McCourt) の *Teacher Man* (2005) という作品の中で語られる、彼自身の教師時代のエピソードに出てきます。フランク・マコートは、『アンジェラの灰 (*Angela's Ashes*)』(1996) でピューリッツァー賞を受賞し、この作品が映画化されてすっかり有名になりました。2009年に79歳で亡くなっています。

マコートの教師生活は、ニューヨーク市の職業技術高校で始まります。第1日目に彼が教室に入ると、2人の男子生徒が弁当のことで言い争いの真っ最中で、からかわれた生徒が、からかった生徒にサンドイッチの入った紙袋を投げつけ、それが最前列の机の前に落ちました。

苦労の末教員になったマコートの教室での第一声は、従って、Good morning, everyone.ではなく、Hey! でした。しかし、新米教師の声は無視され、2度目の Hey! も無視されます。何とかして授業を逃れようとしている生徒たちは、先生に注意を払うどころか、喧嘩が始まることに期待をかけています。

「食べものを投げるんじゃない!」と注意しますが、「先生よう、もう投げちまったのに言っても無駄だよ。弁当は床に落ちてるんだからさあ。」後ろの席の生徒がそう言うのと、ほかの生徒たちがどっと笑います。

マコートは自分が試されているのを感じました。ここで、ボスが誰なのか生徒にわからせなければなりません。

次の瞬間、彼は落ちている袋を拾い、中からサンドイッチを取り出しました。見るとイタリア人のお母さんが作ったと思われる、自家製パンにたっぷりとソーセージや野菜をはさんだサンドイッチです。食べものにも困る少年時代を過ごしたマコートの目には、大変ぜいたくな弁当です。

マコートはそれを生徒たちの目の前で平らげると、空の袋を丸め、ゴミ箱に1発で命中

させました。

弁当を投げた生徒が、「先生よう、それ俺のだぜ。」するとほかの生徒たちは「おまえは黙ってろ。」と言い、マコートの味方をします。

見回っていた校長先生が、マコートを廊下呼び出して、「生徒の昼食を朝、食べるなどというのは教育上不適当です。」とひとしきり訓戒を与えます。

「校長先生、なんて言ってたの?」教室に戻ったマコートに生徒が聞きます。「朝、教室で弁当を食べるのは禁止ということだ。」

「先生は弁当なんか食ってねえ。」「不公平だぜ。」

生徒はもうすっかりマコート側についているのでした。

上のセリフは、このときマコートが言ったものです。「お母さんに言ってくれ。ただし、投げたことは言うなよ。」「オーケー。俺のお母さん、シシリー島生まれでさあ、投げたなんて言おうもんなら殺されちゃうよ。」

マコートが生徒に伝えたかったのは、もちろん「おいしく食べた。」ということだけではありません。「君は大事にされているんだよ、君のお母さんを、そして君のアイデンティティを大切にするんだぞ。」ということでしょう。しかし、それをそのまま言ったのではこの学校の生徒たちには通じません。

マコートのとった行動は、必ずしもほめられたものではないかもしれませんが、多様な文化背景をもち、貧しい生活の中で社会に対する無力感を感じている生徒たちには、少なくとも彼のメッセージは伝わったのです。この場合、お母さんに伝えてということで、生徒へのメッセージを伝えているというのが、うまいところです。

マコート先生の教師生活最初のほめことは、どの教科書にも載っていないほめことばだったわけです。

Broadening the mind — and the language — with travel!

Tokai University
Peter J. Collins

I never knew my grandfather, but he must have been a remarkable man. While still in his early 20s, he decided he wasn't ready for a wife, children, and a desk job, so he found himself a menial job on a ship, and for six months sailed all over the world! Though he never had more than a few dollars in his pocket, he managed to see cities like Lisbon and Cairo, Singapore and Perth before returning to his sleepy hometown.

The local newspaper described his experience as an adventure. Today, however, we might describe it as *vagabonding*. The word "vagabond" has traditionally suggested a penniless, jobless roamer. But in 2002, Ralph Potts' travel memoir, *Vagabonding*, became a bestseller, giving "vagabond" a positive spin and English a new word.

If you have some vacation time coming up and vagabonding doesn't appeal to you, not to worry. These days, the possibilities are almost endless, and the travel industry is continually coining terms to describe new options. Hoping to explore exotic, remote locations, Indiana Jones style? Then *adventure tourism* may be for you. If, on the other hand, you're looking for study opportunities during

your time off, why not consider edutourism? You might even find a package merging the two, and become an eduventurer. Another efficient way to go is *bleisure travel*. You might have a business meeting in Beijing, but give yourself a leisure day, too, to see the Great Wall.

For travelers who wish to experience unspoiled nature, but are unwilling to disturb the environment, *ecotourism* is the answer. Whether rafting down the Amazon or trekking in the Himalayas, ecotourists tend to hire only local guides, and try to avoid damaging natural attractions. Social activists might also be interested in *voluntourism*, drawing on the word "volunteer." *Voluntourists* may help build a school in Tanzania or teach children in Cambodia, in addition to doing some sightseeing.

Some brands of tourism seem self-explanatory. If we hear sports *tourism*, we imagine a weekend skiing in Nagano, or flying to Brazil and supporting our home country during the Olympics. And *hobby tourism* suggests activities such as birdwatching or photography. *History tourists* might visit Gettysburg, Pennsylvania, which offers numerous attractions related to the Civil War battle that took place there. And thousands of tourists visit Meiji Mura in Aichi Prefecture every year.

The meaning of *gastrotourism* may be less obvious. The suffix "gastro-" relates to the stomach, "gastronomy" referring to the cooking and eating of fine foods. As a *gastrotourist*, you might tour California's Napa Valley, tasting this year's white wines, or

spend a week visiting London's best restaurants. You're also likely to find yourself in *gastropubs*, casual local restaurants offering surprisingly gourmet menus. If you invest this much time and money on dining out, you're a gastronaut, a play on the word "astronaut."

Speaking of astronauts, a new option is emerging for high-end travelers: *space tourism*. For about \$200,000, you can board a space shuttle, experience a few minutes of weightlessness and enjoy views of our planet from suborbital space before heading back to earth. The space tourism industry is still in its infancy, but it looks to be up and running by 2013, so you'll want to start saving your money now!

On a more somber note, the term *grief tourism* describes visits to places where death and suffering have occurred within living memory. Three examples from my own travels come to mind, one being the concentration camp at Dachau, Germany. Seeing Ground Zero in New York, where the World Trade Center stood until the 9/11 attacks, affected me deeply, as did the school-turned-prison I visited in Phnom Penh.

Cemetourism is not as grim; it describes visits to important cemeteries. Arlington National Cemetery, outside Washington D.C. is one example; millions have visited President John F. Kennedy's grave there. And tourists in Paris can stop by Père Lachaise, the world's most visited cemetery, to see where dozens of composers, artists, and politicians are buried.

For people with a favorite TV show or movie, *set-jetting* is a fun alternative. The

phrase is a pun on "jet-setting," which means spontaneously flying somewhere fun, without worrying about time or money. Set-jetting, on the other hand, describes traveling to see the setting of a favorite movie or TV show. You can join a *Sound of Music* tour in Salzburg, the *Sex and the City* tour of New York, or even do a *Winter Sonata* package in South Korea.

More and more people, however, are looking for low-cost vacation alternatives. If time and budget don't allow for a hotel, why not go on a *paliday*? Coined in 2009 by an online train ticket retailer as a blend of "pal" and "holiday," a paliday means staying with friends or family in their home. Another term for this is couch *surfing*, since you may end up sleeping on their sofa!

If you're not interested in couch surfing, why not settle for a *daycation*, or day trip? *Daycationers* might go to a nearby amusement park, take a drive in the country, or visit a local museum. This idea of having fun while staying close to home is also called a *staycation*, and offers busy people a chance to *chillax* – to "chill" or calm down and relax.

Whatever your travel plans, try to avoid a *vacation hangover*, the exhaustion that sometimes hits when you get back home. And make sure you don't become a *bragabond* like my grandfather – in other words, a vagabond who endlessly brags about travel experiences!





平成24年度用 中学校教科書準拠
教授用ソフトシリーズ

デジタル教科書

ONE WORLD English Course

1～3年

文字や絵, 写真が大きくなるからわかりやすい!



教育出版デジタル教科書のポイント

- ツールは直感的に選べるようにわかりやすいデザインにしています。
- カラーユニバーサルデザインを意識して、色数を抑えた判別の工夫をしています。
- 電子黒板がない場合も、パソコンとプロジェクタ等で使えるように設計しています。
- 文字のサイズは、読みやすさを損わない範囲で最大限大きく表示しています。

各学年予価

73,500円 (本体+税)

※各学年・各分野ごとのお求めとなります。 学年・分野をまとめた価格ではありません。

※本記載の内容、製品の仕様は予告なく変更する場合があります。

英語教育 通信 ONE WORLD Info (2011 年 秋号) 2011 年 9 月 30 日 発行

編集：教育出版株式会社編集局

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光

印刷：大日本印刷株式会社

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL : 011-231-3445 FAX : 011-231-3509

函館営業所 〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL : 0138-51-0886 FAX : 0138-31-0198

東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL : 022-227-0391 FAX : 022-227-0395

中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL : 052-262-0821 FAX : 052-262-0825

関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL : 06-6261-9221 FAX : 06-6261-9401

中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL : 082-249-6033 FAX : 082-249-6040

四国支社 〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL : 089-943-7193 FAX : 089-943-7134

九州支社 〒810-0001 福岡市中央区天神 2-8-49 ヒューリック福岡ビル 8F
TEL : 092-781-2861 FAX : 092-781-2863

沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL : 098-859-1411 FAX : 098-859-1411